様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０９４５
研究課題名（和文）　インフォーマルな音楽学習のフォーマルな教育機関への導入に関する先進的事例の研究
研究課題名（英文）　Introduction of informal musical learning into formal leaning situations: investigation of advanced examples

研究代表者
水戸　博道（MITO HIROMICHI）
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：６０２１９６８１

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、民族音楽などインフォーマルな場で学習されている音楽を、小中学校や大学などのフォーマルな教育機関でどのように教えたらよいのかを明らかにすることである。インフォーマルな場で行われている音楽をフォーマルな教育機関に導入するための重要な課題の一つは、インフォーマルな音楽が持つ固有の学習方法を、いかにオリジナルに近い形でフォーマルな教育実践に導入するかである。このような課題に対してわが国の音楽教育は、その重要性を認識しているものの、実践面において未だ研究の途上にあるといえる。一方、海外においては、インフォーマルな場の音楽をフォーマルな教育機関で取り扱ってきた歴史が長く、先進的な事例も多い。本研究では、民族音楽などのインフォーマルな場で行われている音楽を、フォーマルな教育機関に導入している海外の先進的な事例を調査し、インフォーマルな場の音楽の学校教育への導入方法を検討した。

研究成果の概要（英文）：
The traditional music has been taught in the informal learning situations. The present study aims to clarify the way of introducing traditional music learning into formal learning situations. One of the most important problems in the introduction of traditional music into formal learning situation is how to maintain its original form of learning. Although Japanese music education realizes the importance of this problem, the research for practicing traditional music learning in the formal education system is still in the course of development. On the other hand, the foreign countries have a long history in teaching traditional music in the formal learning situations, and there are many advanced practices. The study discussed the way of introducing traditional music into school music education through the investigation of the advanced examples in the foreign countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：音楽教育　伝統音楽　公的教育　インフォーマルな教育　アイルランド音楽

１．研究開始当初の背景

1990 年代に入り日本の音楽教育は、フォーマル（公的）な教育機関で取り扱う音楽のジャンルが飛躍的に広がった。1998 年の学習指導要領の改定を境として、邦楽や諸民族の音楽に対する関心は以前にもまして高まった。また、日常生活の中で楽しまれているさまざまなポピュラー音楽の価値も見直されるようになった。こうしたインフォーマル（非公的）な場の音楽は、フォーマルな教育機関で教えられることも年々増え、最近では、中学校音楽科の授業で、邦楽、民族音楽、ジャズ、ポピュラー音楽などの実技の授業が行われることも多い。

フォーマルな教育機関にインフォーマルな場の音楽を導入する時に注目しなくてはならないのは、両者の学習方法の違いである。フォーマルな教育機関で中心的に教えられてきた西洋のクラシック音楽と、インフォーマルな場で行われている音楽は、その音楽様式が異なるだけでなく、学習方法そのものが異なるのである。民族音楽研究では、さまざまな民族音楽の持つ独自の学習方法を調査し、その学習方法がフォーマルな教育機関で行われる学習方法と共有するものが非常に少ないことを報告している(Merriam, 1964)。また、ジャズやポピュラーの音楽家たちの技能獲得過程を調べた研究でも、高い音楽的技能がフォーマルな教育機関とは異なる学習方法で獲得されていることを明らかにしている（Berliner, 1994; Green, 2001）。

日本の音楽教育においても、こうした問題意識にのっとり、インフォーマルな場の音楽の学校教育への導入については、それぞれの音楽が持つ独自の学習方法を検討する必要があることを認識している。しかし、日本においては、それぞれの音楽のオリジナルな学習方法を維持するという必要性は十分理解されつつも、実践面において未だ研究が立ち遅れているのが現状である。一方、海外においては、歴史的に古い段階から、インフォーマルな場で行われている音楽をフォーマルな教育機関に導入している例が見られる。たとえば、イギリスやアメリカにおいては、ジャズやポピュラー音楽は、今や学校外だけで学習されている音楽ではなく、小中学校、大学、そして成人のためのアダルトスクールなどのフォーマルな教育機関で教えられる重要な音楽ジャンルとなっている。また、民族音楽に目を向けると、たとえば、インド音楽などは、徒弟制度に基づく伝統的な学習方法にとても厳密でありながら、今では中学校や大学などで教えられることも多い。そして、こうしたインフォーマルな場の音楽のフォーマルな教育機関への導入の事例を調べてみると、オリジナルの学習方法を巧みにフォーマルな教育システムに融合させている事例が多く見られるのである。

２．研究の目的

本研究では、海外の先進的事例を調査することによって、インフォーマルな音楽学習のフォーマルな機関への導入の方法を探った。本研究では、調査結果を中学校音楽科の選択の授業に応用できることを視野に入れ、インフォーマルな場の音楽の実技を含めた学習方法について検討した。したがって、調査対象とする教育機関は、実技指導が行われていることを条件とし、中学校の実践に加えて、少人数のグループ学習を行っているワークショップなども含めた。

調査対象は、アイルランドの伝統音楽のワークショップ、マレーシアの中学校における伝統音楽の学習、そして、イラク音楽の学習である。研究対象とするアイルランドの伝統音楽、マレーシア伝統音楽、イラク音楽は、その文化的背景も音楽様式も大きく異なる音楽である。しかし、インフォーマルな音楽学習の特徴をさまざまなジャンルの音楽で比較した筆者の研究によると、異なるジャンルの音楽であっても、学習方法の特徴にはいくつかの共通点が存在することが認められている(Mito, 2007)。本研究では、こうした前提に立ち、海外の異なるジャンルの音楽の実践を調査研究することによって、インフォーマルな音楽のフォーマルな教育機関への導入方法における本質的な課題や方策を明らかにした。

３．研究の方法

インフォーマルな場での学習方法を比較した筆者の研究によると、その特徴は（１）口承法の重視（２）豊かな音楽環境への‘浸り’（３）熟達者とのかかわり合いによる学習の３つに集約することができる(Mito, 2007)。本研究では、こうしたインフォーマルな学習方法の特徴がフォーマルな教育機関にどのような形で導入されているのかを探った。

（１）口承法

音楽の口承伝承は、インフォーマルな音楽学習の特徴として最も多く取り上げられる学習方法である。伝統音楽、ジャズ、ポピュラー音楽の学習では、新曲の学習は楽譜を媒体として行われることは少なく、音そのものが口承で伝えられることが多い。しかし、こうした口承性は、弟子が師匠のもとで絶えず一緒に学ぶことや、初心者が熟達者と日常的にかかわりを持てることが前提となる学習方法である。したがって、限られた時間しか学習者と指導者がかかわりを持てないフォーマルな教育機関では、なかなか機能しにくい学習方法である。しかし、海外のフォーマルな教育機関では、録音や楽譜を副次的に併用するなどの方策を用い、口承法をできる限り残していく試みがなされている。本調査では、こうした学習方法が、口承性の本質を失うことなくどのように機能しているのかを調査する。

（２）豊かな音楽環境への‘浸り’

インフォーマルな音楽学習は、学習者が生活のさまざまな場面で豊かな音楽環境に‘浸る’ことから始まることがわかっている。伝統音楽、ジャズ、ポピュラー音楽の学習方法を調べた研究で一様に報告されていることは、学習者が学習の初期の段階からきわめて豊富な時間音楽を聴く機会が与えられていることである。こうしたインフォーマルな学習方法は、時間割の枠組みが明確に決められているフォーマルな教育機関で実践することが極めて難しい。しかし、海外では、学習者を取り囲む音楽環境の価値が認められ、豊かな音楽環境を学校の中に積極的に作り上げていく試みが行われている。本研究では、音楽学習につながっていく豊かな音楽環境が、どのようにフォーマルな教育機関の中に構築されているのかを調査する。

（３）熟達者とのかかわり合いによる学習

インフォーマルな場での音楽学習では、音楽的知識・技能が教師から生徒へと一方的に教えられることは少ない。学習者は仲間同士、または熟達者と一緒に音楽活動をすることによってさまざまな知識・技能を習得する。海外の音楽教育では、フォーマルな教育機関の中に生徒と教師が一体となるコミュニティを作り、その中で熟達者と初心者が協同して音楽活動を行い、そこからさまざまな音楽的知識・技能を習得する方法が模索されている。本研究では、フォーマルな機関の中に構築されたこのようなコミュニティの中で、学習者のかかわり合いがどのように学習として機能しているのかについて調査する。

４．研究成果

調査は、22 年度にアイルランドの伝統音楽のワークショップ、24 年度にマレーシアの伝統音楽の授業と、イラク音楽のウードのワークショップを調査し、学習方法をさぐった。

（１）調査対象の概要

22 年度は、アイルランドのクレア県にて行われた伝統音楽のワークショップに参加し、アイルランドの伝統音楽の公的機関での学習方法を調査した。アイルランドの伝統音楽は、従来は家庭やコミュニティで学習されてきたものであるが、近代化の影響で家庭やコミュニティが持つ伝統音楽の伝承機能は、年々低くなってきている。そのため、アイルランドの伝統音楽の学習は、学校やコミュニティセンターなどの公的機関によって行われることも多い。また、アイルランドの伝統音楽を広くアイルランド以外にも広める目的で、音楽祭やワークショップでのアイルランド音楽の学習もアイルランド国内で盛んに行われている。

今回参加したワークショップは、アイルランドのクレア県ボッグヒルにあるコミュニティセンターにて、夏期期間中１ヶ月にわたって開催された。ワークショップは、１ヶ月の期間中、１週間ごと４つに分けられており、ほとんどの参加者は、その４つのワークショップのいずれかに参加する形となっていた。１週間のワークショップ期間中は、参加者のすべてがセンター内の宿泊施設に滞在した。

１日の主な流れは、午前中２時間のワーク

ショップ、午後２時間のワークショップと個人練習、そして、夜間は、ワークショップ会場の近くの町村のパブを訪れ、アイルランド音楽のセッションを見学したり、実際にセッションに参加したりした。

24 年度は、マレーシアのコタバル（ケランタン州）の伝統音楽と、イラクの伝統音楽ウードの学習方法を調査した。コタバルの伝統音楽に関しては、コタバル市の中学校と大学の音楽の授業を観察した。また、イラクの伝統音楽に関しては、ロンドンのタクシーム音楽院において、イラク人ウード奏者にイラク音楽の学習方法について聴き取り調査等を行った。

コタバルの中学校と大学では、伝統的なガムラン音楽や影絵音楽が音楽の正規授業の中で行われており、すべての学年においてこれらの音楽を段階的に学習していた。伝統音楽は、コタバルにおいても、地元のコミュニティの中で学習する機会は少なくなっており、音楽の授業で初めてガムラン音楽や影絵音楽に接する生徒も多くみられた。しかし、授業実践では、教師によるさまざまな工夫がほどこされており、ほとんどの生徒が着実に技能を獲得していた。特に、曲の音高やリズムを記憶していく方法において、担当教員が独自に開発した口承法（唱歌：しょうが）用いられており、この方法が複雑な伝統音楽の音型やリズムを素早く記憶することに効果的にはたらいていた。

イラクの伝統音楽については、学習方法において、音楽院独自の学習メソードが開発されていることがわかった。また、このメソードでは、旋律の学習に関して、西洋の５線譜を基本とした記譜法が効果的に用いられていた。イラクの音楽には、西洋の記譜法では表せない音程などが存在するが、西洋の記譜法をアレンジして、イラク音楽を５線譜で学習する巧みな方法が開発されていた。

（２）学習方法の特徴

本研究では、インフォーマルな場で行われている音楽が、フォーマルな学習場面に導入される場合、インフォーマルな学習方法の特徴である（１）口承法（２）豊かな音楽環境への浸り（３）熟達者とのかかわり合いの３つの特徴がどのようにフォーマルな場に導入されているのかをさぐった。

①口承法

音楽を口承法で学習するのか、それとも楽譜を通して学習するのかは、音楽の様式上の特徴と、学習者の音高の聴き方に関係してくる重要な問題である。今回の調査でも、口承法については、それぞれの音楽の学習において、さまざまな方法と考え方があることがわかった。

アイルランドの伝統音楽は、器楽が主流となっているが、口承法による学習が特に重視されていた。参加者の中には、音楽を耳から覚えることに困難を示す者も多かったが、すべての講師のセッションにおいて、口承によって耳から曲を覚えることが重視され、楽譜の使用は制限されていた。セッションによっては楽譜が用意されていたり、記譜が許されていた場合もあったが、これらは、一旦耳から曲を覚えた後に提供されるもので、最初から楽譜を用いて曲を覚えたり、記譜が許されることはなかった。

講師に対するインタビューで口承法に固執する理由を尋ねたところ、「一度覚えた旋律を忘れないため」とする理由が多く、複数の講師から、「耳から旋律を覚えたら絶対忘れないが、楽譜から覚えるとすぐに忘れてしまう」という同じ回答が得られた。また、口承法による学習方法についても、一つの旋律を正確に覚えてから次の曲を覚えるという方法ではなく、できてもできなくても多くの旋律を同時に覚えていくことが大事であることが強調された。また、曲を耳から覚える場合、核となる音を拾っていき、断片的であっても覚えた音だけを演奏していくことも必要であることが説明された。

講師の多くは、耳から旋律を覚えることを苦手とする参加者が多いことは了解済みであり、その上で口承法の効果を、確固とした理念と確信にもとづいて伝えていた。筆者自身も、口承法による学習を苦手とする一人であったが、１週間の期間中、自分の記憶形式そのものが変化していくのが実感できた。覚えた旋律を頭で確認しながら学習するのではなく、自然に体に覚え込ませて行く学習方法（記憶形式の変化）を１週間の短い期間でも体験することができたのである。不思議なことに、大量の旋律を学習させられた１週間のワークショップの後半では、ある曲を今回のワークショップで学習したかしないかも思い出せないのに、その曲の一部を演奏する

ことができた。こうした点を講師に話したところ、ワークショップではまさにこのような記憶形式の転換を意図していることが説明された。

一方、コタバルの中学校でのガムランや影絵音楽の授業においては、音楽教師の考案した楽譜と、唱歌（しょうが）による口承を併用しながら新曲が覚えられており、楽譜使用と口承法の折衷的な学習方法がとられていた。ガムランの学習で特徴的だったのは、教師が考案した楽譜に基づいて楽器を演奏する時、生徒は必ずその旋律を唱歌によって歌っていた点である。楽譜読むときに、同時に唱歌による音感のトレーニングもおこなっていたのである。

イラクのウードの学習においては、曲の学習は基本的に楽譜を通して行われていた。楽譜は、西洋の５線譜を基本としたものであった。楽譜を使用する理由を尋ねたところ、「イラクのウード音楽は、一つのタクシーム（西洋音楽でいう調のようなもの）をさまざまな高さの調で演奏したり、曲の中でタクシームの種類が変わること（西洋音楽でいう転調のようなもの）が頻繁に起こるため、楽譜によって音名を認識する必要があるから」との説明があった。つまり、音の相対的な関係の知覚だけでは、タクシームの移調や転調に対応することができないため、旋律は絶対音高で知覚した方がよく、５線譜による学習は、その点で効果的であるとのことであった。また、西洋の記譜システムを使うことについては、「イラク音楽特有の記譜法も古来よりあるが、その記譜システムは、西洋の５線譜に比べると未熟であるため、現在では５線譜を使用することが多い」とのことであった。

今回調査した音楽では、それぞれの音楽様式の特徴の違いによって、口承法へ強くこだわった学習をおこなう場合、口承法を柔軟に使用する場合、また、口承法は用いない場合などがあることが明らかになった。ただ、アイルランドの伝統音楽のワークショップで見られたように、フォーマルな機関における学習でも口承法にこだわる場合、フォーマルな学習形態においても口承法が機能しえるという確信のもとに口承法が行われていることがわかった。

②豊かな音楽環境への浸り

アイルランドのワークショップでは、学習期間が１週間と短かったが、期間中アイルランド音楽にどっぷり浸かる工夫がさまざまな点から行われていた。ワークショップが行われたボッグヒルセンターは、一番近い町からも３kmほど離れたところに位置し、参加者は、すべてセンターの宿泊施設に寝泊まりすることが条件となっていた。参加者は、ワークショップの講師とともに朝から晩までくらし、日中は少しの休憩時間をのぞいてワークショップと自主練習に割り当てられていた。また、夜間は、ワークショップが始まる前日の夜も含めて、毎日近くの町村のパブでセッションに参加したり見学したりする機会が設けられていた。ワークショップの時間が午前と午後で約２時間ずつ、それに加えて自主練習が１時間から２時間あり、夜間のパブでのセッション参加も２時間から３時間行われた。トータルすると１日に７、８時間はアイルランド音楽に触れていたこととなり、まさに音楽に浸る環境がつくりあげられていた。

他の調査対象の音楽では、参加形態がレッスン形式のものであったり、学校でおこなわれていたものであったりしたため、「豊かな音楽環境への浸り」は詳細に調査できなかった。

③熟達者との係わり合いによる学習

熟達者とのかかわり合いによる学習は、アイルランド音楽のワークショプにおいて、顕著にみられた。アイルランドのワークショップでは、アイルランドの伝統音楽の学習経験が参加者によって様々であったが、意図的にそれらの参加者を一つのグループにしてセッションが行われた。その結果、上級者と一緒に演奏することによって、演奏のタイミングやアイルランド音楽特有の旋律の装飾法などを、耳から体得することができた。また、セッション以外でも、上級者が初心者を教えたり、さまざまな情報を提供したりする場面が多く見られた。参加者の国籍や年齢も異なっていたにも係わらず、アイルランド音楽への興味・関心を中心とした一つのコミュニティが出来上がっていたと言える。

今回の調査では、インフォーマルな場で行われてきた伝統音楽の学習をフォーマルな教育現場で行っているケースを調査した。その結果、特に、口承法の用い方について、異

なる学習方法の実例を詳細に検討することができた。伝統音楽を学校などで学習する場合、楽譜の使用の有無は、音高知覚の形式とも関連する重要な問題である。今回調査した様々な事例では、口承法を用いるかどうかを考える上で、音感の育成という点を視野に入れて学習方法が検討されていることがわかった。

今回の調査では、学習方法の中で「豊かな音楽環境への浸り」と「熟達者とのかかわり合いによる学習」については、アイルランド音楽以外では詳細に調査することができなかった。これらの点については今後の課題としたい。

＜参考文献＞

Berliner, P. F. (1994). *Thinking in jazz*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Green, L. (2001). *How popular musicians learn: A way ahead for music education*. Aldershot: Ashgate.

Merriam, A. P. (1964). *The anthropology of music*. Chicago: Northwestern University Press.

Mito, H (2007). Learning musical skill through everyday musical activities. Unpublished PhD thesis, Roehampton University.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

① MITO Hiromichi,
Necessity of the Adoption of Movable Doh by Absolute Pitch Possessors.
International Society of Music Education (ISME), 29th World Conference,1-6 August 2010, Beijing, China

６．研究組織

(1)研究代表者

水戸博道（MITO　HIROMICHI）
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：６０２１９６８１

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし